

*Cousin Phillis*における Narrator-CharacterとしてのPaul

中村 吏花

I

Cousin Phillis (1858)において Elizabeth Gaskell は Paul Manning という語り手を設定し、Paul にヒロイン Phillis Holman と過ごした若い頃を回想させている。Gaskell は Paul の Manning 一家と Phillis の Holman 一家とを並列関係に置き、両親にとって唯一の子供である Paul と Phillis に尊敬する両親特に父親の影響を強く受けて成長したという共通点を持たせる。¹ 同時に、Paul に文明、Phillis には自然のイメージを与えて両者を対比させる。Paul は機械工の父親を持ち、その導きで鉄道関係の職に就くが、Phillis は非国教会の牧師兼農場主の父親の下、Hope 農場で自然と一体化している。² また Paul の母親の旧姓を Moneypenny に、Phillis の方を Green にしていることや、Paul ・ Phillis 共に 17 歳で作品に初登場させることから、Gaskell の意図は明白である。

Paul が語っていくのは、Phillis が鉄道技師 Holdsworth へ恋をし、その悲恋を経て精神的な独立へ向かう姿である。Phillis は失恋に心を痛み、娘が成熟する現実を認識しようとする父親によって苦悩を強いられる。Paul は Phillis の恋愛・親子関係の様々な局面に直接関わっており、観察者としてだけでなく登場人物として重要である。以下、登場人物としての Paul に注目し、対人関係を通してその人物像を明らかにする。また、Paul と Phillis を対比させた Gaskell が、Phillis の自立を Paul に語らせたことの意味を探る。

II

まず両親との関係から Paul の人格を考察する。Paul は父親 Mr Manning を仕事で業績を成してきた人物としてだけでなく、優れた人格の持ち主として尊敬する。「発明の才と忍耐力」を兼ね備えた父親が、「鉄道機械にいくつかの価値ある

改良」を為し遂げたことを述べる Paul は、「それを利益のために行ったのではない」と付け加えることを忘れない。Paul にとって父親が自慢の種であることは、自分の長所を父親と結びつけて考えていることにも明らかである。Phillis の父親 Holman 牧師に鉄道工事について説明してやった Paul は、明晰でよい頭をしていると褒められる。その知識をどうやって身に付けたかを尋ねられると、誇らしげに「父からです」と答える。さらに“Have you not heard of his discovery of a new method of shunting? It was in the *Gazette*. It was patented. I thought every one had heard of Manning's patent winch” (276) と続け、父親の才能が息子のひいき目による評価でなく広く公に認知されたものであることを主張する。語り手として、自分に対する父親の影響力の大きさをことさら強調することはしていないが、偉大な父親に従うことが Paul にとっては極自然なこととして語られていく。

Paul の就職に当たっては、勤め口を探し、下宿先を決めたのは父親である。Paul は、鉄道の支線工事を請け負う技師の下で助手の職を得て、一人暮らしを始めるときの心境を、“It is a great thing for a lad when he is first turned into the independence of lodgings. I do not think I ever was so satisfied and proud in my life” (259) と語るが、Paul が満足感に浸りながらしみじみと感じた独立とは、父親に敷いてもらったレールの上を走り出すことだと理解できる。実質的に Paul は父親の意のままに動いている状態にあり、たとえ経済的には親の援助なしに生活すると言っても、大本の意思決定の部分で自立とはかけ離れている。後に Paul の結婚する相手が父親の共同経営者の娘であることから、Paul は父親の示した道をたどり続けることが想像できる。

Paul にとって父親の決定は絶対であるため、それが自分の希望とは違う場合にも自分の気持ちの方を重視しようという意識はない。³ Paul が実家を離れた際、父親は毎週手紙を書くよう命じる。変わり映えのしない日々の中で便箋を埋める作業に頭を悩ませながらも、Paul は指示通りにする。Paul が父親に従順であることの根底には、父親の深い愛情を認識していることがある。Paul が故郷から新しい仕事場のある Eltham へ出るときには、父親が付添う。そのときのことを Paul は “My father had given up two precious days, and put on his Sunday

clothes, in order to bring me to Eltham, and accompany me first to the office, to introduce me to my new master” (259)と思い出すが、ここで Paul がいかに大切に育てられたかが明らかになっている。Mr Manning 自身は父親としての信条を “Spare the rod, and spoil the child” (260) とするものの、息子が語る実情は “unconsciously, his heart had yearned after me, and his ways towards me were more tender than he knew” (260)である。優しい父親と素直な息子との間には信頼関係が成り立っているのだが、父親に黙って従うことに慣れてしまっているために、息子 Paul は積極性に乏しく自ら考え判断を下す能力に欠ける。

Paul の受け身の性格は、拒絶したいような指示を与えた母親でなく、母親にそう思わせる原因を作った自分自身を咎めるところにも見られる。母親が手紙で Heathbridge に住む従姉妹 Cousin Holman を訪ねるように言ってきたとき、牧師に苦手意識を持つ Paul は彼女の夫 Holman 牧師と関わることを考えてうんざりするが、“I was enraged at myself for having named Heathbridge at all, when I found what it was drawing down upon me” (263) と自分に腹を立て、手紙に Heathbridge のことを書いた自らの行動を悔いるのである。母親の強い要望に応えるため、牧師一家と関係を持ちたくないという自らの感情には蓋をして、Paul は Holman 一家について尋ねることにする。ここで Paul が “I would not disobey my parents in such a trifle, however irksome it might be” (263)と述べているように、両親に服従することが Paul の大前提である。

Paul は、自分に指示を与えてくれる誰かを必要とする。親元を離れて出会ったその誰かが、上司 Holdsworth である。Paul は Holdsworth の知識・教養・経験を崇め、彼が大陸生活で身に付けた外国風の服装・身のこなしには憧れを抱き、彼を自らの英雄的存在と位置づける。その言葉は Paul に対して絶対の影響を持つ。Paul の Holman 家訪問を決定づけたのは、「親戚を訪ねて行って、どうだったか報告したまえ」という Holdsworth の一言である。Paul は “I was so in the habit of yielding to his authority, or influence, that I never thought of resisting, but went on my errand, though I remember feeling as if I would rather have had my head cut off” (265) と振り返るが、これは対 Holdsworth に限らず、自分より上位にあると認める者に対し Paul が共通して示す姿勢である。

Paul は自らの主観によって Holdsworth との関係を確認することができない。

Holdsworth に心酔し、“I was proud of being seen with him” (261) と感じるほどであるが、Paul は ‘being with him’ でなく ‘being seen with him’ と言っている。これは、第三者に認めてもらうことで自分と Holdsworth との結びつきを確信したいという、Paul の心境の表れである。Holdsworth を Holman 一家に引き合わせたいという気持ちになったのは、Holdsworth と自分との関係を Holman 家の人々に評価してほしいと思ったからである。同じく、Holman 一家を Holdsworth に紹介することで、Holman 牧師との結びつきを確かめたいと考えている。

Paul は牧師全般に対して “demureness” (271) という負のイメージを抱くが、Holman 牧師は Paul の考える牧師像とは一線を画するために Paul の中で完全に肯定される。Holman 牧師は、聖職者としての勤めを怠らず農場主としては完璧に農作業を管理し、幅広く旺盛な知的的好奇心と強靱な肉体とを併せ持つ人物である。深い敬意を抱く Holman 牧師に厳しく問い詰められるとき、Paul は正直に話す以外為す術がない。Holman 牧師は、Phillis の体調が優れず精神的に不安定な状態にあることと Holdsworth の結婚との関連に気付くと、Paul を問いただす。Phillis が出来る限り動揺を隠し何とか気丈に振る舞って自らの気持ちを悟られまいとするにもかかわらず、知っていることを話すようにという Holman 牧師の言葉を聞くと、Paul はあっさり白状する。“It will not do much good, I am afraid. . . but I will own how wrong I did; I don't mean wrong in the way of sin, but in the way of judgement. Holdsworth told me just before he went that he loved Phillis, and hoped to make her his wife, and I told her” (344) と、言いよどむこともなく秘密を打ち明けた Paul は、案の定 Holman 牧師から “to spoil her peaceful maidenhood with talk about another man's love” (345) と激しく叱責される。しかし、例え命じられた通りに行動して非難を受ける結果になろうとも、Paul にとっては自分より力を持つ他者の強い意志に導かれることが心安いのである。

III

Paul の消極的な姿勢は、Phillis を恋愛対象とする可能性を消し去る。Phillis

に初めて会ったときの印象を、Paulは“*She was dressed in dark blue cotton of some kind; up to her throat, down to her wrists, with a little frill of the same wherever it touched her white skin. And such a white skin as it was! I have never seen the like*” (266) と思い出す。Paulの視線の動きは、Phillisを女性として意識したことを証明している。しかしPhillisがラテン語を理解することを知り、また居間にある外国語の本のどれにもPhillisの署名を見つけると、PaulはPhillisへの感情を一変させる。

I took down one or two of those books once when I was left alone in the house-place on the first evening—Virgil, Caesar, a Greek grammar—oh, dear! ah, me! and Phillis Holman's name in each of them! I shut them up, and put them back in their places, and walked as far away from the bookshelf as I could. Yes, and I gave my cousin Phillis a wide berth, although she was sitting at her work quietly enough, and her hair was looking more golden, her dark eyelashes longer, her round pillar of a throat whiter than ever. (275)

Paulは慌てて本を棚に戻し自分から遠ざけようとする。Uglowが“*They [Phillis's books] make Paul. . . feel uncomfortably inferior; he abandons all romantic hopes*”と述べているように、⁴自分より優位にある人物に服従することの身に付いてしまっているPaulは、自分より優秀なことの判明したPhillisに思いを寄せることはできない。Phillisから見れば自分と結婚するなど“*condescending*” (293) だろうと考えるほど、Paulは自らを卑下する。自分の劣位を認識して以降は、“*as a sister*” (293) また“*sisterly*” (326) などでPhillisを形容するが、意図的に「妹」と繰り返して恋愛はありえないことだと自らに納得させるかのようである。“*Much of the story's poignancy comes from the silence and denial not of Phillis but of Paul himself, the sense of missed opportunity, so lightly sketched in*”とUglowが言うように、⁵「兄」であろうとするPaulが痛々しい。

出会った当初から、PaulはPhillisが自分を男性として意識しない現実を痛感させられる。自分より教養も身長も高いPhillisに引け目を感じていた19歳のPaulは、「16歳より上だとは思わなかった」と17歳のPhillisに言われてさらに自信を消失させる。また、昼食の準備を手伝おうかと申し出て、“I like to have you with me” (283)というPhillisの答えを聞いたときには、二人の新密さに恋愛の要素が皆無であるからこそその率直な発言だと悟り、複雑な心境にさせられる。Phillisが’sisterly’の態度であることが明らかとなるとき、Paulは妹として振る舞うPhillisの対応に合わせるだけである。

常日頃から理路整然と考察していくことやそれに基づいて決断を下すことを他人任せにしているために、Paulは問題を深く掘り下げて考えることができない。辛そうなPhillisを見ると耐えられず、“I was not sure if what I longed to do was wise” (322)と自分がしようとしていることの正当性を確信できぬまま行動を起こす。好意を寄せ合う本人同士PhillisとHoldsworthは直接相手へ想いを打ち明けることはしないが、Holdsworthがカナダへ旅立った後のPhillisの憔悴ぶりに気付いたPaulが、PhillisにHoldsworthの気持ちを伝えてしまう。これをKeatingは、経験不足に導かれたPaulの“error of judgement that precipitates Phillis’s illness”と言う。⁶ Paulは今現在のPhillisの苦しみを察し、それを和らげてやりたいとは思っているが、その瞬間のことしか視野に無いのである。“I could not bear to see the sweet serenity of my cousin’s life so disturbed by a suffering which I thought I could assuage” (322)の言葉通り、苦悩するPhillisを目にすることから一刻も早く解放されたいという気持ちがPaulの中で強く作用している。自分が恋の仲介者となったことがこの先どのような余波をもたらすのか、あるいは、Holdsworthの方に何かしらの働きかけをすべきではないかといったことに関して全く考え及ばない。「告白」によってPhillisにつかの間の幸せを与えたPaulは、そのわずか半年後、今度はHoldsworthの結婚という残酷な報告で以てPhillisを苦しめなければならない。

Paulが自分にとっての困難な状況から逃れ続ける中で、Holman一家には決して回避できない親子関係の重大局面を迎えさせる。PhillisとHoldsworthとのことをHolman牧師に厳しく問われたPaulは、すぐさま真実を告げてどう対処

すべきか思い悩むことから逃れるが、非難されている Paul を庇おうとした Phillis には、覚悟を持ってしか口に出せない 'love' の言葉で Holdsworth への愛を父親に認めさせる。Holman 牧師の “Phillis! did we not make you happy here? Have we not loved you enough?” (346) という言葉は Phillis の心に突き刺さり Phillis は脳炎に倒れる。Holdsworth の行為というより Paul の発した言葉が、Phillis には両思いの歓喜と失恋の絶望をもたらし、Holman 牧師には娘がもはや幼い少女ではない事実を突きつける。Wright が “[Gaskell] was conscious of the power of words, particularly as utterance” と指摘するように、⁷ Gaskell はここで Paul、Phillis、Holman 牧師それぞれの発言に強烈な力を持たせている。Phillis は失恋も然る事ながら、父親に咎められ父親を苦しめてしまったという自責の念によって、さらなる苦悩を強いられるのである。

IV

脳炎による死の縁から逃れた Phillis は、Holman 家の女中 Betty の叱咤激励をきっかけに、自ら回復へ努力することを誓う。現実を受け止めて積極的に生きようとするとき、Phillis が助けを求めるのは父親でなく Paul である。Phillis は少しの間 Manning 家に身を寄せさせて欲しいと頼み、“Only for a short time, Paul. Then—we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can, and I will!” (354) と強い決意を述べる。作品に幕を下ろす Phillis のこの発言について、Keating は「昔の平穏な日々」に戻るものの不可能性から “irony” と捉え、⁸ また、Foster は「昔」に戻ることが可能でもなければ望ましくもないことから “regression” と考察する。⁹ 確かに ‘the old days’ そのものに戻ることはできないが、かつてのような ‘peace’ であれば、親子三人の努力によって再び構築できるのではないか。Phillis の意志が「退歩」でないことは、Gaskell が元々構想していた物語の最後で、逞しく生き抜く Phillis が描かれる予定であったことから判断できる。現在の結末からずっと時を経た Holman 牧師亡き後、Phillis は Holdsworth から得た知識を用いて村の排水工事を監督し、さらに独身のまま孤児を引き取り母親になっているはずであった。¹⁰ 父を失い夫もない Phillis は、文字通り自分で自分を支える独立した存在となる。Hughes と Lund は “Farmer

and preacher, Mr. Holman (“whole man”) represents the idealized, integrated life of as earlier time” と記しているが、¹¹ Phillis は父親からその名を引き継いでおり、ヒロインが性別を超越した ‘whole man’ として自立を完成させることが Gaskell の中では定められていた。その第一歩を踏み出そうとするととき Phillis は Paul を必要とする。これは、Gaskell が精神的な救い主として Paul の価値を認めていることを意味する。

受け身の姿勢は Paul の弱さである反面、他者を別け隔てなく受け入れる優しさとも考えられる。Mr Manning は息子を “a good sensible breed o’lad, as has never vexed or troubled his mother or me” (292) と説明して満足気であるが、そのような両親の期待・希望を裏切りたくない気持ちから、Paul は父母に従う息子になっている。そして、他者の望みに応じてやろうという強い思いが、Paul を受動的な人間にするのである。

Paul は他者の心情・微妙な心の動きを感じ取ることのできる人物でもある。Holdsworth の告白を聞く以前から、Paul は Phillis と Holdsworth の間にあって両者の想いを察知しているし、家事を預かる者としての Cousin Holman の動揺に気付いてやれるのも Paul だけである。Mr Manning が Holman 家で蕪切り機改良の説明をしようと暖炉の燃えさして調理台に図を描くとき、台が汚されることを心配する Cousin Holman に目を向けてやれるのは Paul だけである。また Holman 一家が顔を揃えるとき時折 Cousin Holman が浮かない表情になるのは、自分の理解と関心を越えた事柄に夫と娘とが等しく興味を示して語り合うときだということも感じ取っている。

Paul は Holman 牧師に自らを悔い改める機会を与えてやる。Holman 牧師に解雇された農場労働者 Timothy Cooper が、誰に頼まれるでもなくまた誰に認められるでもなく、Phillis のために行動していた事実を知らせると、Holman 牧師は “I have been too proud in my own conceit” (354) と言い、苛立ちに任せて Timothy を見捨てたことを後悔する。仕事に関しては全く無能な Timothy の素朴な優しさを知った Holman 牧師は、同時に自分を過信していた現実を認識する。Paul は Holman 一家に悲劇的な要素をもたらしただけでなく、父娘それぞれに家族や自分自身を見つめ直させたのである。

V

Phillis と過ごした日々を思い返している Paul は、Phillis の初恋を描きながら、同時に Holman 家に大変な苦しみを与えてしまった自らの苦い過去を直視している。これは困難を避ける傾向にあった Paul が、精神的な成長を経た証と見ることができる。受動的で自己主張に欠けるという Paul の性質が、主として父親崇拜の意識によって育まれてきたことを考えると、今の Paul は父親の強すぎる影響の下から脱却できていることが伺えるのである。Paul の変化を決定的にしたと思われる出来事については、17 歳の「独立」を語る場面の直後に記されている。一人暮らしを始めた満足感の次に襲ってきた感情が孤独だったと打ち明けた後、「決して厳しさを装うことはしないが父親よりはるかに厳格だった」母親が自分を庇ってくれたときのことを “I remember. . . how she [Paul's mother] pleaded for me once in my riper years, when I had really offended against my father's sense of right” (260) と思い出している。作品中で描かれるのは 17 才から数年間の Paul であるが、それよりもずっと後 “riper years” を迎えたとき、どのような状況であったかは定かでないものの Paul は父親に強い反対の姿勢を示したのである。形ばかりの「独立」から連想されたのが、Paul にとって真の「自立」となった父親との確執であった。

Phillis に及ばない人間であることを自認する Paul は、Phillis よりはるかに長い時間を要してようやく本当の意味での自立に到達する。Gaskell は Paul に Phillis の成長過程を語らせることで、自らの自立を証明させている。Paul Manning は、遅い歩みながら常に成長し続けるのである (man-ing)。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第 14 回大会（2002 年 10 月 6 日）で行った発表に基づいている。

1. Holman 夫妻は息子 Johnnie を亡くしている。Cf. Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis and Other Tales*. Oxford: Oxford UP, 1981. 267, 327, 337. 以下この作品からの引用はすべてこの版による。
2. 舞台となる Heathbridge の Hope 農場は Gaskell 少女時代の思い出の地

Sandlebridge 農場がモデルであり、Heathbridge の近くにある Hornby は Knotsford を、Hornby と鉄道で結ばれようとしている Eltham は Manchester を、それぞれモデルとしている。

3. Mr Manning は Paul に Phillis を結婚相手として考えてはどうかと提案したことがあるが、それを命じていたならば、Paul の Phillis への対応あるいは父親への姿勢のどちらかが変化したであろう。
4. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber, 1993. 545.
5. Uglow 545.
6. Peter Keating, Introduction. *Cranford and Cousin Phillis*. By Elizabeth Gaskell. Harmondsworth: Penguin, 1976. 28.
7. Terence Wright, *Elizabeth Gaskell 'We Are Not Angels': Realism, Gender, Values*. Basingstoke: Macmillan, 1995. 147.
8. Cf. Keating 29.
9. Cf. Shirley Foster, *Elizabeth Gaskell: A Literary Life*. Houndsmills: Palgrave Macmillan, 2002. 163.
10. Cf. John Chapple and Alan Shelston eds, *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2000. 259-60.
11. Linda K. Hughes and Michael Lund, *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*. Charlottesville: UP of Virginia, 1999. 163.